

【論文】

1782年のウェストミンスター補欠選挙

中村 武司

はじめに

1. レ・サントの勝利とロッキンガム内閣の困惑
 2. ロドニの授爵の意味
 3. フッドとレイの候補者擁立と補欠選挙
- むすびにかえて

はじめに

1782年秋、ニューヨーク近海に到着したイギリスの海軍少将サー・サミュエル・フッド（アイルランド貴族としてはフッド男爵）のもとに、同年6月に実施されたウェストミンスター補欠選挙の知らせが本国から届いた。フッドが候補者に指名されたものの、最終的には彼の子息が辞退したというのが、その内容である。翌1783年2月、フッドは、海軍士官にして海軍主計局長（Comptroller of the Navy）であるサー・チャールズ・ミドルトン（のちのバラム卿）にあてた手紙のなかで、この選挙にかんして次のように記した¹。「ウェストミンスタの厄介事から幸運にも逃れられたとは！候補者からわたしの名を取り下げるにあたり、わが息子はどれほど賢明だったことでしょうか。……フォックス氏の愚かで敵対的なふるまいにわたしも無関心ではいられないものの、破滅の淵から救ってくれたことから、彼に感謝の念さえ抱いているほどです」。さらにフッドは、「庶民院の議席に何の野心ももっておりませんし、どこであれ自ら出馬するつもりは決してないのです」と続け、たうえで、議会にたいする自らの見解や立場をミドルトンに吐露したのだった。

¹ Sir John Knox Laughton (ed.), *Letters and papers of Charles, Lord Barham, Admiral of the Red Squadron, 1758–1813*, 3 vols (London, 1907–11), i, pp.249–51: Sir Samuel Hood to Sir Charles Middleton, 1 February 1783. ほぼ同内容の手紙は、次の2つの史料にも収録されている。David Hannay (ed.), *Letters written by Sir Samuel Hood (Viscount Hood), in 1781–2–3* (London, 1895), pp.155–61: [A Copy.] Hood to [George] Jackson, 29 January 1783; John Fortescue (ed.), *The Correspondence of King George the Third from 1760 to December 1783: printed from the original papers in the Royal Archives at Windsor Castle*, 6 vols (London, 1927–8), vi, pp.208–12: No. 4062, Lord Hood to [General Sir William Fawcett?], 16 January 1783.

これまでもこれからも、海軍での勤めこそが、わたしの最大の望みなのです。わたしは国王を尊敬しておりますし、祖国にも深い愛着を感じています。ささやかながらも、その力が及ぶかぎり、国王と祖国のために尽くすことが残る人生の誇りと栄光なのです。その本分からして、わたしは国王や祖国のために戦うのには適していると自負しておりますが、議会で大臣のために戦うのにはまったく不向きであるとお話ししなければなりません。仮にその力があつたとしても、議会で勤めは、海軍士官の真の性格を傷つけると考えています²。

18世紀イギリス最大の都市選挙区ウェストミンスターにおいて、1782年6月に実施された庶民院の補欠選挙とは、1780年総選挙で当選したサー・ジョージ・ブリッジズ・ロドニ提督が、後述する1782年4月のレ・サント諸島 (Les Saintes) の戦いにおける戦功からイギリス貴族に列せられ、貴族院に移ったことで起こったものである。結局この選挙は、1784年総選挙でもウェストミンスターから立候補するサー・セシル・レイが、無投票で当選するという結果に終わった。

しかしながら、なぜフッドが、このとき候補者として指名されたのか。また立候補が取り下げられたのは、どのような事情によるのか。ルイス・ネイミアとジョン・ブルックスが編集した『庶民院、1754－1790年』をはじめ従来の研究は、1782年6月の補欠選挙を無視するか、わずかに言及するにすぎず、ここにあげたような問いに何も答えてはくれない³。しかし、筆者がすでに明らかにしてきたように、18世紀末から19世紀初頭のウェストミンスター選挙区の政治文化を考えるうえで、ロドニやフッドのような海軍の英雄が重要な意味をもつ以上⁴、1782年の補欠選挙は看過してよい事例などではなく、一考に値しよう。そこで本稿は、この選挙にかんして、その歴史的脈絡や経緯の再構成を以下で試みることにしたい。

1. レ・サントの勝利とロッキンガム内閣の困惑

レ・サント諸島の戦いとは、1782年4月9日から12日にかけて、西インド諸島のグアドループ島とドミニカ島のあいだに位置するレ・サント諸島近海において、ロドニ提督率いる36隻のイギリス艦隊とフランソワ・ド・グラス伯率いる33隻のフランス艦隊とのあいだでくりひろげられた

² Laughton, *Letters and papers of Charles, Lord Barham*, i, p. 250.

³ Sir Lewis Namier and John Brooke (eds), *History of Parliament: the House of Commons, 1754–1790*, 3 vols (London, 1964). 現在、議会史財団による庶民院議員と選挙区の一連の研究は、以下のオンライン版から閲覧することができる。History of Parliament Online <URL= <http://www.historyofparliamentonline.org>>. とくに断らないかぎり、本稿における議員などの基本的な情報はこのオンライン版に依拠したものである。

⁴ この問題にかんしては、以下の拙稿を参照されたい。中村武司「ウェストミンスター選挙区における体制支持派の提督とイギリス海軍の「神話」、1780－1806年」、『西洋史学』254号(2014年)、19－37頁；同「急進的なウェストミンスターを見直す」、『人文社会論叢・人文科学篇』(弘前大学人文学部)、第34号(2015年)、19－38頁；同「ネルソン提督の再来？——ナポレオン戦争時代のイギリス海軍の「神話」とコクリン卿」、『人文社会科学論叢』(弘前大学人文社会科学部)、第1号(2016年)、83－102頁。

海戦である。フランス艦隊はスペイン艦隊と合流したのち、英領ジャマイカの攻略を企図していた。イギリス艦隊は、4月12日の戦闘でフランス艦隊の戦列を突き崩し、副司令官であるフッドが旗艦ヴィル・ド・パリ号を降伏させ、司令長官であるグラス伯を捕虜とするなど、大きな戦果をあげたのだった⁵。

ヨークタウンでのコーンウォリス将軍の降伏（1781年11月）をはじめ、アメリカ独立戦争でのイギリス軍の敗北や失態があいつぐなか、イギリス最大の砂糖植民地であるジャマイカを救ったレ・サントの勝利は、国民の大きな熱狂を引き起こした⁶。戦勝の報がロンドンに伝わったのは、戦いから1ヵ月以上が経過した5月18日のことで、ロドニからの戦況報告書を掲載した『ロンドン・ガゼット』紙がその日のうちに発行された⁷。当時ヒンドン（Hindon）選出の議員だったナサニエル・ウィリアム・ラクソールは、後年出版した回想録のなかで、勝利への熱狂ぶりをこう伝えている。「グラスにたいするロドニの勝利の報を受け取ったとき、首都と国全体は驚喜の渦のなかに投げ込まれたのである」⁸。翌週には新聞各紙が戦いをめぐる記事を連日にわたり掲載し、ロドニの戦功をこぞって称賛した。その例のひとつとして、5月21日の『モーニング・ヘラルド』紙の記事をみておこう。

ロドニの勝利の結果とは、彼自身や国王陛下の軍隊にとって名誉なことである以上に、この国にとって有益なことである。ジャマイカが救われたのだ。……この勝利により、西インドにおけるわれわれの優位が確立し、失われた財産を回復する機会が与えられたのだ（下線は筆者によるもの。原文ではイタリック）⁹。

海軍の勝利を祝うべく、晩には建物の窓が照明され、祝い火が焚かれ、教会では祝賀の鐘が鳴るなどといったお決まりの催しは、ブリテン諸島各地でおこなわれた¹⁰。それは、イギリスから立法上の独立を回復したばかりのアイランドでも例外ではなかったのである¹¹。

⁵ レ・サント諸島の戦いについて、簡単には、Kenneth Breen, 'George Bridges, Lord Rodney, 1718?-1792', in Peter le Fevre and Richard Harding (eds), *Precursors of Nelson: British admirals of the eighteenth century* (London, 2000), pp.242-4をみよ。

⁶ スティーヴン・コンウェイは、レ・サントの勝利にたいする当時の人びとの反応や認識を探ることで、アメリカ独立戦争期におけるブリティッシュネスの再定義の問題を考察している。Stephen Conway, 'A joy unknown for years past: the American war, Britishness and the celebration of Rodney's victory at the Saints', *History*, 86 (2001), pp. 180-99.

⁷ *London Gazette*, 14-18 May 1782, pp.2-4.

⁸ Henry B. Wheatley (ed.), *The historical and the posthumous memoirs of Sir Nathaniel William Wraxall, 1772-1784*, 5 vols (London, 1884), ii, p.319.

⁹ *Morning Herald and Daily Advertiser*, 21 May 1782, p. 2; *Public Advertiser*, 21 May 1782, p.4.

¹⁰ E.g., *Parker's General Advertiser and Morning Intelligencer*, 23 May 1782, p.3; *Morning Chronicle and London Advertiser*, 23 May 1782, p. 3.

¹¹ レ・サントの勝利とグラタン議会の成立の双方に熱狂的に反応するという一見矛盾したアイランドの状況

レ・サントの戦いをめぐるメモリアル（記念＝顕彰行為）も説明しておこう。まず5月22日に庶民院で、その後27日には貴族院で、ロドニ提督をはじめとする将兵たちへの感謝決議（vote of thanks）が満場一致で採択された。5月23日の庶民院の審議では、ウィリアム・ブレア、ウィリアム・ベイン、ロバート・マナーズ卿ら戦死した3名の勅任艦長を追悼するために、ウェストミンスター寺院へのモニュメント建立も満場一致で決議されたのである¹²。ロドニの勝利によって敵国からの占領を免れたジャマイカでも、帝国の救世主である彼に感謝の意を表し、その功績を長く称えるために、1783年2月にモニュメント建立が決議された¹³。なおロドニ本人のモニュメント建立を庶民院が決議したのは、彼が亡くなった翌年の1793年6月のことで、ウェストミンスター寺院ではなく、セント・ポール大聖堂に配置されることとなる¹⁴。

ところで、レ・サント諸島の戦いにおける勝利に人びとが興奮するなか、ときのロッキンガム内閣は、反対にそれに大きく困惑していた。勝利の報が伝わる1ヵ月ほど前の4月20日、同内閣は、西インド諸島に展開中のイギリス艦隊の司令官職からロドニを更迭し、ヒュー・ピゴット提督を後任に任命するという閣議決定をおこなったためである¹⁵。海軍大臣でロドニの友人でもあったオーガスタス・ケッペル提督は、彼の更迭に反対したものの、決定を覆すにはいたらなかった¹⁶。だが、準備を整えたピゴットがプリマスから出港したのは、まさに勝利の報がロンドンに届いた5月18日のことであった。任命を撤回してピゴットを呼び戻そうとしても、もはや間に合う状況にはなかった。

ロッキンガム内閣がロドニの更迭を決定したのは、カリブ海のオランダ領シント・ユースタティ

については、Jennifer McLaren, 'Celebrating the battle of the Saintes: imperial news in England and Ireland, 1782', *Éire-Ireland*, 51: 1 & 2 (2016), pp. 34–60が詳細に分析している。

¹² *The Parliamentary Register, or, History of the Proceedings and Debates of the Houses of Lords and Commons*, vii, pp. 182–91: Commons, 22 May 1782; vii, pp. 192–3: Commons, 23 May 1782; viii, pp. 312–28: Lords, 27 May 1782. アイルランド議会でも同様にロドニへの感謝決議は満場一致で採択された。 *Journals of the House of Commons of the Kingdom of Ireland*, xx, p. 385: 30 May 1782.

¹³ Joan Coutu, *Persuasion and propaganda: monuments and the eighteenth-century British Empire* (Montreal and Kingston, 2006), pp. 240–51; Siân Williams, 'The Royal Navy and Caribbean colonial society during the eighteenth century', in John McAleer and Christer Petley (eds), *The Royal Navy and the British Atlantic World, c. 1750–1820* (London, 2016), pp. 27–50, esp. pp. 27–9.

¹⁴ 詳しくは以下の拙稿をみよ。中村武司「帝国の殉教者たち——ナポレオン戦争時代のイギリスにおける軍人のメモリアル」、『人文社会論叢・人文科学篇』（弘前大学人文学部）、第29号（2013年）、37–58頁。

¹⁵ Fortescue, *The Correspondence of King George the Third*, v, pp. 481–2; No. 3676, Lord Shelburne to the King, 21 April 1782; p. 482: No. 3677, the King to Lord Shelburne, 21 April 1782; p. 488: No. 3687, Lord Shelburne to the King, 26 April 1782; *Morning Chronicle and London Advertiser*, 27 April 1782, p. 3. 海軍省がロドニへ司令官職の交替を告げる文書を送付したのは、5月1日のことである。Godfrey Basil Mundy, *The life and correspondence of the late Admiral Lord Rodney*, 2 vols (London, 1830), ii, p. 326: Philip Stephens to Rodney, 1 May 1782.

¹⁶ Thomas Keppel, *The life of Augustus Viscount Keppel, Admiral of the White and First Lord of the Admiralty in 1782–3*, 2 vols (London, 1842) ii, p. 380.

アス島をめぐる、1781年に彼が起こしたスキャンダルによるところが大きい。アメリカ独立戦争当時、シント・ユースタティアス島は、中立国貿易の貨物集積地として使われていたため、アメリカの大陸軍への補給や支援は、同島を経由して公然とおこなわれていた¹⁷。この島には数多くのイギリス商人が住んでいたが、なかにはアメリカへの武器・弾薬の横流しという利敵行動をおこなう者もいたのである。

1780年12月、イギリス政府はオランダに宣戦布告し、アメリカへの補給線のひとつを断つという目的から、ロドニ提督とジョン・ヴォーン将軍にシント・ユースタティアス島の攻略を命じた。翌1781年2月、同島は一夜にして占領されたが、その後ロドニは、捕獲賞金を得るという目的から、住民の帰属を問わず無差別に資産を没収するという挙に出たのだった。戦争によりこの島に逃れてきたアメリカの忠誠派やほかのイギリス臣民も同じ憂き目にあった。またロドニは、ユダヤ系商人を過酷に扱い、彼らの資産の没収を徹底的に進めた。これらの没収行為について、フッド提督は海軍省第二書記官であるジョージ・ジャクソンにこう伝えている。「彼ら[ロドニとヴォーン。補足は筆者によるもの。以下同様]は、不正にも略奪をほしいままにしたわけではないと世間を納得させようにも、きわめて難しいことが分かるでしょう」¹⁸。その後ロドニは、西インド諸島の利害関係者から資産の返還と賠償を求める数多くの訴訟に巻き込まれたばかりか、議会において、エドモンド・バークに激しく追求されることとなる¹⁹。歴史家アンドルー・オショーンネシは、ロドニによるシント・ユースタティアス島の資産没収とその売却、また彼が議会での対応のためにアメリカ海域から一時的に離れたことが、結果としてヨークタウンの敗戦を招き、ひいてはそれは、アメリカ独立戦争におけるイギリスの敗北の一因となったとみなしているほどである²⁰。

こうした事情から、その当時イギリス本国と西インド諸島においてロドニの名声や人気は地に墜ちており、彼を更迭するという閣議決定は妥当性を欠くものではなかったといえよう。しかし、レ・サントの勝利により、ロドニがイギリス帝国の要というべきジャマイカを救ったことから、シント・ユースタティアス島の一件は、たちまち忘れ去られてしまったか、あるいは声高に批判するのがためられる状況となってしまったのである。しかも、司令官職の交替をめぐる人事が、党利党略によるものとして、内閣への反感をいっそう強めたかもしれない。ロドニは先のノース内閣の支持者であるのにたいして、その後任となったピゴットはロッキンガム派で、海軍大臣のケッペルのもとで海軍委員 (Lord of the Admiralty) の要職にあった。ピゴットは、長らく海上勤務に出て

¹⁷ この段落と次の段落の記述は、アンドルー・オショーンネシの研究に大きく依拠している。Andrew Jackson O'Shaughnessy, *An empire divided: the American Revolution and the British Caribbean* (Philadelphia, 2000), chapter 9; idem, 'The other road to Yorktown: the St Eustatius affair and the American Revolution', *Maryland Historical Magazine*, 97 (2002), pp. 33–59.

¹⁸ Hannay, *Letters written by Sir Samuel Hood*, pp. 18–24: Hood to George Jackson, 24 June 1781.

¹⁹ *The Parliamentary Register*, iii, pp. 299–342: Commons, 14 May 1781; v, pp. 82–97: Commons, 4 December 1781.

²⁰ O'Shaughnessy, *An empire divided*, p. 214.

おらず、有能な士官と評価するのが難しい人物であるため、なおのこと、ロドニの更迭が党派的におこなわれたとの疑いを拭いさるのには容易ではなかつたろう。政権を揺るがしかねないこの問題にたいして、ロッキンガム内閣はすみやかな対応に迫られていたのである²¹。

2. ロドニの授爵の意味

前章での議論をふまえると、ロドニにイギリス貴族の称号が与えられたのは、レ・サント諸島の戦いでの勝利のみならず、それ以外の理由も考慮する必要が出てくる。ラクソールも、回想録のなかで、ロドニの授爵にかんして次のように述べている。「男爵の称号と2,000ポンドの年金の授与とは、内閣によって進んでおこなわれたのではなく、むしろ不承不承ながら強要されたものであることは明白であった」²²。このことはいったい何を意味しているのか。

この問題について、国王ジョージ3世と閣僚のあいだの手紙のやり取りを確認することで、少し立ち入って考えることにしたい。レ・サントの勝利の報が伝わった5月18日から、ロドニに与える恩賞について早くも検討がはじまっていた。国王から内務大臣のシェルバーン伯への手紙によると、海軍大臣のケッペルがロドニに特別な恩賞を与えることを強く進言していたという²³。翌日シェルバーンが国王にあてた手紙から、ケッペルの考えをより詳しく知ることができる。

ケッペル卿は、陛下がサー・ジョージ・ロドニに賛意の重要なあかしをすぐに授与するかどうかを気にしていました。……彼の気持ちは、海軍のメリット勲章 (a Naval Order of Merit) の創設案に傾いていました。この考えについて、わたしは長時間にわたり反対し、いまこれを提案するのは時宜を得ない方法だと彼を説得するよう努めたのです。同時にわたしは、サー・サミュエル・フッドにも注意を向けることが必要不可欠だと話しました。フッドの能力や働きについて議論したのち、彼もそれを認めてくれました。サー・ジョージ・ロドニには「イギリス」貴族の称号を、サー・サミュエル・フッドにはアイルランド貴族の称号を与えるという提案に、……彼が全神経を傾けていることが分かりました²⁴。

²¹ これに関して、ポートルランド公にあてたエドマンド・パークの手紙の一節が興味深い。「西インド諸島における先の大勝利まで、政権の座にあるわれわれの友人たちは人びとからの大きな支持を享受してきました。不幸にして、人びとにとってきわめて好都合なことが、彼らには有益ではなかつたのです」。Thomas W. Copeland, Lucy Sutherland, et al. (eds), *The Correspondence of Edmund Burke*, 10 vols (Chicago, 1958–78), iv, pp.454–7: Burke to the Duke of Portland, 25 May 1782.

²² Wheatley, *The historical and the posthumous memoirs*, ii, pp.330–1.

²³ Fortescue, *The Correspondence of King George the Third*, vi, pp.33–4: No.3759, the King to Lord Shelburne, 18 May 1782もみよ。

²⁴ *Ibid.*, vi, pp.34–5: No.3761, Lord Shelburne to the King, 19 May 1782.

ロドニやフッドへの恩賞とは別に、ケッペルが海軍のメリット勲章の提案を考えていたことは、18世紀末から19世紀前半にかけての軍人への記念の問題を考えるうえで興味深い。事実、メリット勲章の創設は、フランス革命・ナポレオン戦争時代にもたびたび議論されたのち、1805年のトラファルガルの戦いとネルソン提督の戦死を受けて、海陸軍のメリット勲章 (the Naval and Military Order of Merit) として最終的に国王の認可も得たものの、結局は実現することなく終わったのだった²⁵。いずれにせよ、以上の史料の引用から、彼がロドニに与える恩賞として、イギリス貴族位を考えていたことが理解されよう。その理由は、5月20日の国王の手紙から明らかとなる。

サー・ジョージ・ロドニは、その後の指揮をみるかぎりでは戦果を拡大しなかったかもしれませんが。とはいえ、彼は大きな賞賛を受けるに値するでしょう。わたしはアイルランドの子爵位で十分だとおもいますが、わたしが妥当だと考えるこの地位では、ウェストミンスター市の議席が空席にならないというのが、ケッペル卿がイギリスの男爵位を薦めた理由です。男爵位が提案されたとしても、わたしは反対するつもりはありません。しかし、それ以外のイギリス貴族の称号を与えてはならないと述べなければなりません²⁶。

ここでわれわれは、ロドニが、ウェストミンスター選出の議員であることにあらためて目を向けなければならない。本稿の冒頭でもふれたように、宮廷や政府、議会の所在地であるウェストミンスターはイギリス最大の有権者数を誇り、世論の動向が選挙結果を左右する開放型都市選挙区であった²⁷。またアメリカ独立戦争当時、全国的な改革運動の重要な拠点のひとつとなっていたのである²⁸。1780年にチャールズ・ジェイムズ・フォックスがこの選挙区から初当選を果たした背景には、首都で結成されたウェストミンスター連合運動委員会 (the Westminster Committee of Association) の議長に就任すると同時に、同委員会よりウェストミンスタの候補者として推薦されたことがある²⁹。

²⁵ 海陸軍のメリット勲章の創設については、さしあたり拙稿「ネルソンの国葬——セント・ポール大聖堂における軍人のコメモレイション」、『史林』91巻1号(2008年)、188-92頁を参照せよ。

²⁶ Fortescue, *The Correspondence of King George the Third*, vi, p. 36: No. 3762, the King to Lord Shelburne, 20 May 1782. なお史料には、「イングランドの貴族位」(English peerage)などの表現がみられるが、本稿では「イギリス貴族」と表記しておく。

²⁷ ウェストミンスター選挙区の概要については、青木康『議員が選挙区を選ぶ——18世紀イギリスの議会政治』(山川出版社、1997年)、7-26頁のほか、前掲の拙稿「ウェストミンスター選挙区における体制支持派の提督とイギリス海軍の「神話」」も参照されたい。

²⁸ アメリカ独立戦争当時の改革運動の展開については、青木康「議会外勢力の成長——18世紀のイギリス政治」、『歴史学研究』659号(1994年)、31-40、73頁をみよ。

²⁹ この委員会は、クリストファ・ワイヴィルやジョン・ジェブを中心とするヨークシア運動(全国連合運動)の影響を受けて、1780年2月に設立されたものである。フォックスをはじめ、ポートルランド公やジョン・ウィルクス、パークらが設立時に会員として名を連ねたほか、議会外の改革派も多く参加していた。1780年代前半のフォックスの選挙にあたり、募金により選挙費用をまかなうなど、選挙母体としての役割を果たしたのである。しかし、1783年のフォックス=ノース連立政権の成立以降、改革派内部の対立・分裂が深刻化した

ところが、フォックスをはじめとするロッキンガム内閣が更迭を決定したという経緯から、ロドニがウェストミンスタの代表のままでは、前ノース内閣の支持者や世論からの批判が強まり、閣内対立を抱える政権の動揺をもたらしかねない。ロドニへのイギリス貴族位の授与とは、政治的に大きな危険を冒すことなく、ロドニの議席を空席にすることを目的としていたと考えられる。

もっとも、政府がそう望んだからといって、新貴族の創設は国王大権のひとつである以上、ジョージ3世が最終的に認めなければ実現しない。そもそも勝利——この場合、議会での感謝決議の対象となったものを意味する——への貢献を理由に、軍人にイギリス貴族の称号がただちに授与された例はアメリカ独立戦争以前にはほとんど存在せず、したがってロドニへの授爵はきわめて異例なものだった³⁰。くわえてジョージ3世とロッキンガム内閣は、緊張関係にあった。先述の5月20日の手紙からも、国王がイギリスの男爵位の授与に反対するつもりはないが、積極的に賛成していないとみることができよう。

実際のところ、ロドニへのイギリス貴族位の授与とそれにともない実施されるウェストミンスタ補欠選挙については、閣僚のあいだでも意見が分かれていた。シェルバーンがジョージ3世にあてた手紙にも、次のように書かれている。「わたしは、彼[ロッキンガム侯]あるいはその一派がウェストミンスタの議席を空席にすることを望んでいるとは考えてはおりません。なぜならピット氏がきっと議員と選ばれるでしょうし、彼は彼らにたしかに反感を抱いており、彼らからの反感もすでに感じているからです」³¹。この手紙でシェルバーンは、首相の考えや態度だけでなく、政権から距離を取っていたウィリアム・ピット(小ピット)が³²、ウェストミンスタから選出される可能性を国

ため、しだいに開催されなくなった。英国図書館(British Library)に所蔵されている同委員会の議事録を確認すると、1785年7月11日を最後に会合の記録は残されていない。British Library(以下、BLと略記する)、Add MS 38593-5: Minutes of the Westminster Committee of Association. 同委員会の活動やウェストミンスタ選挙については、以下の研究を参照のこと。Eugene Charlton Black, *The association: British extraparliamentary political organisation, 1769-1793* (Cambridge MA, 1963); Ian R. Christie, *Wilkes, Wyvill and reform: the parliamentary reform movement in British politics, 1760-1785* (London and New York, 1962); Anthony Page, *John Jebb and the enlightenment origins of British radicalism* (Westport, 2003); Marc Baer, *The rise and fall of radical Westminster, 1780-1890* (Basingstoke and New York, 2012).

³⁰ マッカヒルとワッソンの共同研究によると、1704年から1815年にかけて新たに創設されたイギリス貴族位252件のうち、陸海軍士官出身者は42件確認され、とくにフランス革命・ナポレオン戦争時代には、25もの貴族が新規に創設されたのである。海軍士官の場合、セント・ヴィンセントやダンカン、ネルソンのように、勝利への貢献を理由にイギリス貴族に列せられた例が目立つ。しかしロドニの授爵以前では、1747年にジョージ・アンソンが、同年のフィニステレの戦いの戦功により授爵された例が認められるだけである。Michael McCahill and Ellis Archer Wasson, 'The new peerage: recruitment to the House of Lords, 1704-1837', *Historical Journal*, 46: 1 (2003), pp. 1-38より算出。Idem, *The House of Lords in the age of George III (1760-1811)* (Oxford, 2009), pp. 28-9も参照されたい。

³¹ Fortescue, *The Correspondence of King George the Third*, vi, pp. 37-8: No. 3765, Lord Shelburne to the King, 20 May 1782. 首相であるロッキンガム侯は、ロドニの授爵の件について何も知らされていないことに不満を抱いていた。Ibid., vi, pp. 50-1: No. 3785, Lord Shelburne to the King, 1 June 1782.

³² E.g., Michael Duffy, *The younger Pitt* (Harlow, 2000), p. 6.

王に報告したわけである。これにたいする国王の返答とは、次のようなものだった。「もしシェルバーン卿が、ピット氏の有利になるようにウェストミンスター選挙を差配できるのであれば、サー・ジョージ・ロドニにはアイルランドの子爵位よりもイギリスの男爵位を授与するほうがよいとする十分な理由があると考えられるでしょう」³³。

なぜピットが、ウェストミンスター選挙の候補者として有力視されていたのか。1782年3月のノース内閣の退陣とロッキンガム内閣の成立は、改革への気運を大きく高めることになった。たとえば同年4月のウェストミンスター補欠選挙におけるフォックスの再選は、改革への人びとの熱狂がしめされる機会となったほか³⁴、イギリス各地の改革派組織や都市から、内閣交替を国王に感謝する上奏文があいついで提出された³⁵。このような一種のユーフォリアを背景として、5月7日の庶民院の審議でピットは、代表制の現状にかんする調査委員会の設置を提案したのである。この提案は、161対141と20票差で否決されたとはいえ、ピットの改革派としての名声をいっそう高めることになった³⁶。その後、5月15日に開催されたウェストミンスタの有権者集会では、ピットならびに彼の動議を支持したフォックスへの感謝決議が採択されたのち、次期選挙の候補者として、ピットをフォックスとならんで指名することも決議されたのである³⁷。この集会がウェストミンスター連合運動委員会の主宰により開催されたことから、フォックスを中心とする改革派が、ピットの候補者指名を支持したとみなしても誤りではあるまい。

一方ではフォックスをはじめとする改革派、他方ではそのフォックスを嫌悪するジョージ3世、その両者がウェストミンスター選挙の候補者としてピットを希望していたゆえに、このとき、奇妙な意見の一致がみられたといえよう。つまりレ・サントの勝利の恩賞として、ロドニにイギリス貴族位の授与が決定されるにあたっては、動機や思惑はそれぞれ異なるといえ、ウェストミンスター選挙区も無視しえない要因として作用していたのである。

³³ Fortescue, *The Correspondence of King George the Third*, vi, p.39: No 3768, The King to Lord Shelburne, 21 May 1782.

³⁴ 1782年4月のウェストミンスター補欠選挙は、フォックスがロッキンガム内閣の外務大臣に就任したのにもない、議員を辞職したため起こったものである。この選挙の様様については、*Morning Chronicle and London Advertiser*, 4 April 1782, p. 2をみよ。

³⁵ E.g., *London Gazette*, 21–25 May 1782, pp. 1–2.

³⁶ *Parliamentary Register*, vii, pp. 120–41: Commons, 7 May 1782.

³⁷ *Parker's General Advertiser and Morning Intelligencer*, 16 May 1782, p. 1; *Morning Chronicle and London Advertiser*, 16 May 1782, p.3. ウェストミンスター連合運動委員会の議事録を確認すると、小ピットの候補者指名は集会の議題として当初から用意されていたわけではなく、集会で突然提案されたものと考えられる。BL, Add MS 38594, fos. 39–40: 15 May 1782.

3. フッドとレイの候補者擁立と補欠選挙

レ・サント諸島の戦いにおけるロドニの勝利、彼の更迭と授爵、さらにウェストミンスタの補欠選挙をめぐる、内閣への強い批判がくりかえされた³⁸。庶民院でも貴族院でも、ロドニとその将兵への感謝決議が採択されたとはいえ、彼の更迭をめぐる審議はひどく紛糾したのである³⁹。「サー・ジョージ・ロドニの成功がフランス海軍よりも新政権の人気にとっていっそう致命的だというのは、きわめて奇妙なことだ」という辛辣な評もみられた⁴⁰。

このような状況では、ウェストミンスタ選挙の候補者指名は、ピットへの批判を強めることになりかねない。たとえば5月18日に、ホレス・ウォルポールは、長年の文通相手であるホレス・マンにあてた手紙のなかで、ロドニの勝利と更迭、ピットの候補者指名について次のように記している。

ロドニは新しい海軍省によって更迭されましたが、驚くべき素早さでその顛落から復活したのです。前内閣は、彼らに帰すべき勝利を奪われました——しかし、群衆はこの経緯を詳しく調べることはしないでしょ。シント・ユースタティアス島における略奪により信頼を失ったサー・ジョージのかわりに、ウェストミンスタ市はわれらが若きキケロ、ウィリアム・ピット氏を次の総選挙における自らの代表として指名したばかりです。いまやピット氏は、雄弁家としての慎み深さを示して、英雄をその地位から引きずり下ろさないよう請わなければなりません⁴¹。

同様の見解は、『モーニング・ヘラルド』紙にもみられる。同紙はロドニの更迭とウェストミンスタ選挙を関連づけて、ロッキンガム政権、とくにその外相フォックスを批判したのである。そのさい、党派への非難や反感がみられたことに注意する必要がある。

次の総選挙に向けてピット氏とフォックス氏とが手を組んだうえで、サー・ジョージ・ロドニを更迭するためにウェストミンスタ・ホールで頑迷な内閣の党派がおこなった動議くらい時期を誤ったものはない。この国に大きく貢献した勇敢な老提督の後任にピゴット提督が任命され

³⁸ ジェイムズ・ギルレイが作成した以下の諷刺版画もその例としてあげられよう。British Museum, the Department of Prints and Drawings, BM 5992: *Rodney Triumphant – or – Admiral Lee Shore in the Dumps* (1782); BM 5996: *Rodney Inverted – or – Admiral Pig on a Cruize* (1782); BM 5997: *Rodney Introducing de Grasse* (1782); BM 6001: *St George & the Dragon* (1782).

³⁹ E.g., Fortescue, *The Correspondence of King George the Third*, vi, pp.45–6: No 3779, Lord Chancellor Thurlow to the King, 27 May 1782.

⁴⁰ *Morning Herald and Daily Advertiser*, 30 May 1782, p.3.

⁴¹ W. S. Lewis, A. D. Wallace, et al. (eds), *The Yale edition of Horace Walpole's correspondence*, 48 vols (New Haven, 1937–83), xxv, pp.277–81: Horace Walpole to Sir Horace Mann, 18 May 1782.

たことくらい早まったことはない⁴²。

世論の状況から、ピットは、ウェストミンスター選挙への関与は自分に不利益をもたらすと考えたにちがいない。いつとは正確には特定できないものの、後述するウェストミンスター連合運動委員会の会合が開催された5月31日までに、彼は候補者指名を辞退したようである。

ロドニの更迭への批判がくりかえされる一方で、ウェストミンスター補欠選挙の候補者も話題に上がった。ピット以外では、ウィリアム・ウィンダム、フッド提督、ロドニ提督の長男であるジョージ・ロドニの名前が候補者として言及されたのである。

ウィリアム・ウィンダムの名前を最初に伝えたのは、5月21日の『モーニング・ヘラルド』紙である。「サー・ジョージ・ロドニはすぐに貴族院に移り、ノーフォークのウィンダム氏が、勇敢なる提督の後任として、ウェストミンスタの候補者として指名される予定である」と、同紙は伝えている⁴³。フォックスやバークとの親交で知られ、のちに陸軍長官や陸軍大臣などの政府の要職を歴任するウィンダムは、この当時まだ議員ではなかったものの、ウェストミンスター連合運動委員会の会合にしばしば出席していた。ただしウィンダム自身、ウェストミンスタの候補者についての情報には当惑していたようで、ノーフォークの知人にて、選挙に立候補する意思はないと告げている⁴⁴。

フッドについては後述するとして、ロドニの長男であるジョージ・ロドニ陸軍大尉も、候補者として目されたひとりだが、ウィンダムと同様、彼にかんしても噂の域は出ないだろう⁴⁵。当時彼はノーサンプトン選出の議員を務めており、議員在職期間中、ノース政権の支持者だったことで知られる。記録に残る彼の唯一の発言は、父親の授爵をめぐる6月5日のものだけである。

補欠選挙の候補者指名にむけて、具体的な動きが起こるのは、5月31日のことである⁴⁶。その日、ウェストミンスター連合運動委員会は、パレス・ヤードの「王の紋章」亭にて会合を開催した。議長をつとめたフォックスをはじめ29名が出席し、ロドニの後任となる候補者を検討するために有権者集会を翌日開催すると決議して解散した⁴⁷。6月1日、コヴェント・ガーデンのシェイクスピア亭

⁴² *Morning Herald and Daily Advertiser*, 22 May 1782, p.3. 翌23日の同紙でも、次のような記事がみられる。「ロドニ提督の更迭は、党派根性の狂気がいかに理性をはらいのけ、幸福で高貴なものすべてを——国家の繁栄——国民の幸福——いや、帝国の存在さえも——犠牲にするのかを人びとに納得させるだろう」。Ibid., 23 May 1782, p.3.

⁴³ Ibid., 21 May 1782, p. 2; *Morning Chronicle and London Advertiser*, 23 May 1782, p.3.

⁴⁴ William Windham, *The Windham papers: the life and correspondence of the Rt. Hon. William Windham 1750–1810* ..., 2 vols. (London, 1913), i, pp.24–5: William Windham to E. Norgate, 5 June 1782. *The Norfolk Chronicle: or, the Norwich Gazette*, 1 June 1782, p.2も、ウィンダムの立候補について記している。

⁴⁵ *Morning Herald and Daily Advertiser*, 30 May 1782, p.2; *Parker's General Advertiser and Morning Intelligencer*, 3 June 1782, p.3.

⁴⁶ 同日の庶民院では、ロドニの授爵とウェストミンスター選挙のための令状請求について、ジョージ・ジョンストンとフォックスとのあいだに質疑がおこなわれた。*Parliamentary Register*, vii, pp.210–2: Commons, 31 May 1782.

⁴⁷ BL, Add MS 38594, fos. 41–2: 31 May 1782.

で有権者集会が開催され、サー・セシル・レイが候補者として満場一致で推薦されたのである⁴⁸。その翌週の6月3日に開かれた同委員会の会合では、レイの候補者推薦とピットの辞退が正式に報告された⁴⁹。

とはいえ、これまで候補者として話題に上らなかったレイが、なぜ推薦されたのか。彼は、ヨークシア運動に関わり、憲法情報協会（the Society of Constitutional Information）の会長に選ばれたほか、ウェストミンスター連合運動委員会にも参加するなど、かねてより改革運動に深く関与してきた政治家であり、独立した清廉な人物として高い評価を受けていた。改革派にとって、ピット以外では、レイほど候補者にふさわしい人物はいなかったのではないだろうか。

しかしレイは、1782年5月下旬から6月初旬にかけて、四季裁判のためにヨークシアのスカークバラに滞在しており、彼の了解をえないまま、候補者として推薦されたことになる。1784年総選挙のさいにレイが出版した『ウェストミンスタの独立した有権者への手紙』をよると、6月1日の集会の直後から、フォックスが少なくとも2度彼に手紙を送り、出馬を要請していた。まず6月2日にフォックスが送った手紙とは、レイが有権者集会で候補者に選ばれたことを報告し、ウェストミンスターからの出馬を要請するという内容であった。この手紙を受け取った6月4日、レイは、候補者推薦は名誉なことだが、選挙にかかわる多額の費用や自らの財産の状況を考え、立候補を辞退すると返信したのである⁵⁰。その後6月6日にもフォックスはレイに手紙を送り、出馬を再度要請した。フォックスは、この手紙のなかで、同委員会が選挙費用を募金により負担すると説明する一方で、フッド提督の候補者擁立の動きがみられるため、競争選挙となる可能性があるばかりか、現状では候補者の変更は不都合となることから、レイの翻意を強く訴えたのである⁵¹。フォックスがフッドの出馬をひどく警戒していたことが手紙から確認されよう。フォックスの手紙を受け取ったレイは、立候補辞退の意思を撤回し、選挙のために駅伝馬車を乗り継いで急ぎロンドンに向かうことになる。

このようなフォックスらの動きと並行して、フッド提督の擁立をめざす選挙活動も6月3日から本格的にはじまった。ただし、ウェストミンスター連合運動委員会のような組織が進めたわけではないので、新聞の広告や記事ぐらいしか利用できる史料は存在しない⁵²。フッド支持者の選挙集会が

⁴⁸ *Morning Chronicle and London Advertiser*, 1 June 1782, p. 1; *Parker's General Advertiser and Morning Intelligencer*, 3 June 1782, p. 3.

⁴⁹ BL, Add MS 38594, fos. 42-3: 3 June 1782; *Morning Chronicle and London Advertiser*, 4 June 1782, p. 1.

⁵⁰ *A letter to the independent electors of Westminster, in the interest of Lord Hood and Sir Cecil Wray* (London, 1784), pp. 11-13: C. J. Fox to Sir Cecil Wray, 2 June 1782; pp. 13-4.

⁵¹ *Ibid.*, pp. 14-6: C. J. Fox to Sir Cecil Wray, 6 June 1782; pp. 16-7.

⁵² *Parker's General Advertiser and Morning Intelligencer*, 3 June 1782, p. 1. ロッキンガム内閣寄りの『パークーザ・ジェネラル・アドヴァタイザ』紙の記事によると、「ウェストミンスタの平和を乱すために」、フッド提督の擁立は前内閣によりおこなわれたとある。*Ibid.*, 3 June 1782, p. 3. ホレス・ウォルポールも、同様の見解をホレス・マンに伝えている。Lewis, et al., *The Yale edition of Horace Walpole's correspondence*, xxv, pp. 284-5: Horace Walpole to Sir Horace Mann, 10 June 1782.

開催されたのは6月5日のことだが、新聞広告によると、フッドの選挙活動は、ウェストミンスタの有権者であるエドワード・グリーンを中心に進められていたこと、またフッド提督の長子であるヘンリ・フッドが、軍務のため海外にいる父親の代理として立候補を受諾したことが確認できる⁵³。

引き続きフッド側の選挙広告を確認しよう。彼の立候補を正当化するうえで、レ・サント諸島の戦いにおける彼の優れた功績が何よりも重視されたのは言をまたない。これと関係して、過去のウェストミンスタ選挙でも著名な海軍士官を代表として選出されていたことをふまえて、軍務への恩賞としてフッドを選出すべきだとも主張された。すなわちそれは、後年の選挙でもくりかえされる「人びとによる授爵 (a popular peerage)」という考えである⁵⁴。

これまでウェストミンスタ市は、わが国で高く評価されるに値する人物にその票を行使するという名誉を担ってきた。わが海軍旗の名誉を気高くも支持したサー・チャールズ・ウェイジャとサー・ピーター・ウォーレンの両提督をみずからの代表としたのだ。

そうだとしたら、同市が同じ精神を発揮するというあかしは、ヴィル・ド・パリ号の軍旗を奪った人物、この12ヵ月間に、勇敢さと船乗りとしての優れた能力を幾度となくしめしてきた人物を選ぶこと以外にありえないのではないだろうか⁵⁵。

1784年総選挙の関連で興味深いのは、1782年の補欠選挙においても、フッドの「故チャタム伯との信頼に満ちた友好関係」が強調されていたことである⁵⁶。フッドの弟で同じく海軍士官であったアレクザンダ・フッド（のちのブリッドポート卿）が、大ピット夫人であるヘスタ・グレンヴィルの従姉妹マリア・ウェストと結婚したことで、フッド一族とチャタム家やグレンヴィル家との関係が深まっていた⁵⁷。また大ピットは、1778年に死去したとはいえ、なお国民的人気が高く、党派・派閥から距離をとっていたことで知られた政治家である。その彼との関係を想起させることで、フッドが、ノースやロッキンガムの党派とは無縁の「独立した」人物であることを有権者に訴えようとしたと考えられる。6月5日の『モーニング・ヘラルド』紙の記事にも、こう書かれている。「サー・ジョージ・ロドニの授爵により、議会におけるウェストミンスタの議席が空席となったことから、2名の候補者がそれぞれ異なる支持者から推薦された。サー・セシル・レイはウェストミ

⁵³ *Parker's General Advertiser and Morning Intelligencer*, 5 June 1782, p. 1; 6 June 1782, p. 1.

⁵⁴ 前掲の拙稿「ウェストミンスタ選挙区における体制支持派の提督とイギリス海軍の「神話」」をみよ。

⁵⁵ *Parker's General Advertiser and Morning Intelligencer*, 7 June 1782, p. 1. 軍務や戦功を理由とした海軍士官の立候補擁立に反対する意見も聞かれた。E.g., *Memoirs of the life of Sir Samuel Romilly, written by himself; with a selection from his correspondence, edited by his sons*, 2nd edn, 3 vols (London, 1840), i, pp. 228–32: Samuel Romilly to the Rev. John Roget, 11 June 1782.

⁵⁶ *Parker's General Advertiser and Morning Intelligencer*, 3 June 1782, p. 1; *Morning Chronicle and London Advertiser*, 8 June 1782, p. 1.

⁵⁷ E.g., Stanley Ayling, *The elder Pitt, Earl of Chatham* (London, 1976), p. 403.

ンスタ委員会によって、フッド卿は党派とは結びついていないわが国の友人によって推薦されたのである」⁵⁸。

フッドもレイもウェストミンスタを不在としたまま、6月7日に候補者指名のための選挙集会がウェストミンスタ・ホールで開催された。ミドルセクス選出の議員でフォックス派であるジョージ・ビングが議長を務め、フォックスもレイの支持者のひとりとして会に出席していた。レイならびにフッドの支持者が集まったうえで、関係する市民が両候補者をそれぞれ推薦したのち、参加者の挙手をもって支持を確認するという手続きがとられた。その結果、レイ支持者が多数を占めたようにおもわれたことから、最終的にレイが候補者として推薦されたのである⁵⁹。だが、フッドの支持者はまだ諦めておらず、翌日、支持を呼びかける選挙広告が新聞に掲載された⁶⁰。このままでは、競争選挙となるのは避けられない状況にあったといえよう。

しかし、ウェストミンスタ補欠選挙の経緯にフォックスが深く関わっていたことは、その批判者の目には、フッドの出馬にフォックスが反対すべく干渉しているとみえたことだろう。事実、同じ6月7日におこなわれたロドニへの年金をめぐる庶民院の審議では、まさしくその理由から、フォックスは強い批判にさらされたのである⁶¹。当時、ロンドンを訪れていたドイツ人カール・フィリップ・モーリッツも、とくに印象に残ったのか、1795年に出版された旅行記のなかで、この審議の様子を次のように記したのだった。

わたしが庶民院を訪れた最初の日、傍聴席でわたしの隣に座ったイングランドのジェントルマンは、とても親切にも主だった議員が誰なのかを教えてくれた。フォックスやバーク、リグビたちがそうで、彼らの演説を耳にしたのである。審議は勇敢なロドニ提督に、爵位だけでなく、ほかの特別な恩賞を国民が与えるべきかをめぐっておこなわれていた。審議の途中で、若いフィールディング卿がフォックス氏を厳しく叱責していたのをわたしは覚えている。それはまだ大臣の地位にあったフォックス氏が、ウェストミンスタの議員としてフッド提督の選出に反対したために起こったのだ⁶²。

⁵⁸ *Morning Herald and Daily Advertiser*, 5 June 1782, p. 3.

⁵⁹ *Parker's General Advertiser and Morning Intelligencer*, 8 June 1782, p. 3; *Public Advertiser*, 8 June 1782, p. 3.

⁶⁰ *Morning Herald and Daily Advertiser*, 8 June 1782, p. 1.

⁶¹ *Parliamentary Register*, vii, pp. 219–21: Commons, 7 June 1782. 『モーニング・クロニクル』紙は、フォックスを強く非難したフィールディング卿の発言を次のように伝えている。「残念ながらわたしは、功績に報いるという考えが、大臣の頭にはまったく占められていないと申し上げねばなりません。彼はあらゆる礼儀に反しているうえに、勇敢で功績あるフッド卿の選出に反対する〔ウェストミンスタ〕委員会の広告にその名前が記されたことに苦しんでいるのです」。 *Morning Chronicle and London Advertiser*, 8 June 1782, p. 3.

⁶² Karl Philipp Moritz, *Travels, chiefly on foot, through several parts of England, in 1782* (London, 1795), pp. 53–4. John Moir, *History of the political life and public services, as a senator and a statesman, of the Right Honourable Charles James Fox* (London, 1783), pp. 460–3も参照されたい。

フォックスの選挙への関与にたいしては、ロンドンの日刊紙でも、以下のような批判がみられた。

勇敢なロドニと名前を連ねるといふ時宜を得たやり方で、ウェストミンスターの議席を獲得した
閣僚のフォックス氏が、優れた勝利者である同僚から海軍の司令官職を奪うのに大きく尽
力しただけでなく、サー・ジョージの次席の司令官であり、英雄的なフッド卿の第一の反対者
として立ちふさがるのは、むしろ異常なことだ！⁶³

現在みられるウェストミンスター選挙へのフォックス氏の干渉は、サー・ジョージ・ロドニの更
迭とあいまって、彼の以前の信望に付することは決してない。……大勝利をおさめたその直後
に更迭されるというのは、誰もが奇妙におもうことだ。しかも議会の代表を選ぶさいに、どう
して閣僚が人びとの自由な票にこうもあからさまに干渉できるのかは、誰もが理解できな
い。人びとがいうには、このことはフォックス氏とその友人が野党にいたときに、有権者に向
かって約束したことではない⁶⁴。

結局、6月7日の選挙集会における参加者の動向をみて、フッドの子息は、翌8日の新聞の1面
に父親の立候補辞退を告げる広告を掲載した⁶⁵。さらに同日、 Strand 街のグローブ亭でフッド
支持者による選挙集会が開催され、競争選挙によってウェストミンスター市の結束が弱まるとの理由
から、フッドの立候補を取り下げることを決議したのである⁶⁶。かくして6月12日にコヴェント・
ガーデンで補欠選挙が実施され、レイの当選が確定したのだった⁶⁷。

むすびにかえて

1782年6月のウェストミンスター補欠選挙にかんして、本稿はその歴史的脈絡や経緯の再構成を
これまで進めてきた。レ・サント諸島の戦いにおけるイギリスの勝利やロドニ提督の更迭は、アメ
リカ独立戦争や「国制上の危機」により国論が二極化した状況にあって、第2次ロッキンガム内閣
への批判を強めることになった。ロドニが前政権の支持者で、ウェストミンスター選出の議員であ
ったことがそれにいっそう拍車をかけたといえよう。しかも補欠選挙の候補者として、当選したレイ
だけでなく、フッド提督の擁立も進められたのである。

1784年3月、庶民院は解散され、総選挙が実施されることになった。ピット政権は、ウェスト

⁶³ *Morning Herald and Daily Advertiser*, 8 June 1782, p. 3.

⁶⁴ *Public Advertiser*, 11 June 1782, p. 3.

⁶⁵ *Parker's General Advertiser and Morning Intelligencer*, 8 June 1782, p. 1.

⁶⁶ *Ibid.*, 11 June 1782, p. 1; *Morning Herald and Daily Advertiser*, 10 June 1782, p. 2.

⁶⁷ *Parker's General Advertiser and Morning Intelligencer*, 13 June 1782, pp. 3–4.

ミンスタ選挙の政府側候補者として、フォックスと袂を分かったレイだけでなく、フッドにも出馬を要請したのである。本稿の冒頭でも確認したように、フッドは海軍士官の本分から外れるとして、政治への関与を嫌悪していたにもかかわらず、内閣からの要請を断ることはできなかった。彼は後年、弟のアレクザンダ・フッドにこう慨嘆したのであった。

1784年、公人としてフォックス氏に反対するために、ピット氏、バッキンガム卿、グレンヴィル卿によって、士官が身を置くには最も不愉快な状況のひとつに追いやられてしまいました。1788年には政府の懇請にしたがい、官職〔海軍委員〕に就任しました。その結果わたしは窮迫し、悲嘆に暮れてしまったのです⁶⁸。

しかし、本稿で明らかにした1782年の補欠選挙の背景や経緯をふまえると、フォックスの選出を阻止するうえで、フッドほど望ましい海軍出身の候補者はいなかっただろう。その後もピット政権は、ウェストミンスタ選挙の候補者として、海軍の英雄の擁立をくりかえすこととなる。

[付記] 本研究は、JSPS 科研費17K03158の助成を受けたものである。

⁶⁸ BL, Bridport Papers, Add MS 35194, fos. 166–7: Lord Hood to Sir A. Hood, 5 June 1792.